

## 仏教の教え

---

こんにちは、ナビゲーターの金子です。今回は仏教の教えについて紹介してみます。

仏教には多くの宗派がありますが、仏教の教えに共通するものとして、宇宙の理(ことわり)をあらわした三法印があります。三つの法の印と書きます。

その三法印とは 諸行無常、諸法無我、涅槃寂静、です。

三法印を整理すると、

すべては苦であるという釈迦の教えがまず始めにありました。それを裏付けるのが、この世のすべてははかないという諸行無常です。

そして、そういった世界だから自我もない。

執着心からも離れて、修行に励むなかで心の安らかな境地、涅槃を目指しなさい、

というものです。

涅槃とは、絶対安寧の境地です。キリスト教でいえば天国のイメージでしょうか。

悟りを得る方法としては、「四諦」があります。四つを諦らか(あきらか)にすると書いて四諦です。悟りにいたるためのステップを示したもので、苦諦、集諦、滅諦、道諦があります。

四諦を整理すると、

この世はすべて苦しみであるという真理に気づき、その苦しみの原因は執着であると見極めなさい。そして、その原因の執着から離れることで苦をなくすることができると思って、そのための正しい修行をしなさい、

となります。

そのための正しい修行は、八正道で示されます。

八つの正しい道と書いて八正道です。正しくものごとをみる、正しく考えて、正しく語り、正しく行いなさいと続きますが、ここでは省きます。

そのほかにもたくさんのお教えがありますが、これら多くの教えは仏教の発展とともに整理され、また作られたものでした。

ところで、一番大切な、そもそもの釈迦の教えはどうだったのでしょうか？

釈迦の教えの根幹には「縁起」があります。

「縁起」とは、この世のすべてはそれだけで存在はせず、関係でなりたっている、というものです。これを深く理解すると、仏教の教えの捉え方もだいぶ変わってきます。

悟る前の釈迦は「苦」について色々と考えたことでしょう。

しかし、悟りを得て、『縁起』の考え方に到達した釈迦であれば

「苦しいです」という弟子に、『その苦をきっかけにして君は悟りに近づけますよ』と諭すのではないのでしょうか。

「苦しみ」ですら他との関係性において存在するものである、つまり「苦しみ」も相対的なものであって絶対のものではないのです。

悟っていれば「自我」や「この世」がそれだけでは存在しない。

この世があるからあの世があり、自我があるから宇宙があると知っていて、それはあるようでない、ないようであると。

これは大乘仏教の「空」の思想へともつながります。

先に話した「八正道」にしても、縁起を悟った釈迦であれば

『この世に正しいも、正しくもないもない』とか、『あなたが正しいと思っていることを疑いなさい』と、こんな問答もできそうです。

まるで禅問答のようで、じゃあどうすればいいの？との声が聞こえてきそうですが、一つの教えをとってみても、理解度の違いで、全く違ったものが見えてきます。

繰り返しになりますが、釈迦の教えの根幹には「縁起」がありました。

その縁起を深く悟り、新しい感覚で世界を見つめていくこと。

そして、そこから一歩進んで、生き方について。

仏教でいうところの菩薩行について考えていくことが、とても大切な仏教の教えだと思えます。